

礪波 護・岸本美緒・杉山正明編

『中国歴史研究入門』

曾 田 三 郎

広く中国の歴史研究に関係する入門的書物は、これまでにも出版されている。まず小型で携帯にも手軽なサイズのものとして、西嶋定生編『東洋史入門』（有斐閣、1967年）がある。これと同様に、中国を含む広域の歴史研究入門書として『東アジア史入門』（布目潮風・山田信夫編、法律文化社、1975年）もある。また対象を中国に、時代を近代に限定したものとしては、『近代中国研究入門』（坂野正高他編、東京大学出版会、1974年）や『中国近代史研究入門—現状と課題』（辛亥革命研究会編、汲古書院、1992年）がある。「入門」ととくに記されているわけではないが、『近代中国研究案内』（小島晋治・並木頼寿編、岩波書店、1993年）も、同様の性格の書物である。さらに近代の日中関係史という視点からの入門書として、『近代日中関係史研究入門』（山根幸夫他編、研文出版、1992年）も有用である。

このようにこれまでも中国の歴史研究に関係する入門的書物が出版されているのだが、中国の歴史に対象をしばり全時代にわたって研究案内を行うとい

う点で、本書と編集方針が類似しているのは山根幸夫編『中国史研究入門』（上下、山川出版社、1983年）であろう。また時代（王朝）区分によって主要部分が構成されている点でも、両書は共通している。だが継承関係にある入門書としてより強く意識されているのは、同じ年に出版された『アジア歴史研究入門』（烏田虔次等編、全5巻、同朋舎出版）のようである。これは書名が示すように、中国を含むアジアの歴史全般に関わる入門書であるが、第1巻と第2巻は中国の歴史に関するもので（第2巻の途中からは朝鮮史）、やはり時代（王朝）別の構成になっている。第3巻も中国の歴史に関するものであるが、こちらはテーマ別の構成になっており、この編集方針の一部は本書の第Ⅱ部でもいかされている。

本書の構成と特色

本書は「序説」、第Ⅰ部「研究と史資料」、第Ⅱ部「中国歴史研究のために」と続き、最後に各章ごとの文献一覧がつけられている。最後の文献一覧は日本語のものが中心ではあるが、詳細な整理がなされており、本書の特色の一つであると同時に、読者にとっては利用価値が高い。第Ⅱ部は「史資料」を読むための目録学・金石学・考古学・地理学の成果の案内と図書館・書店・工具書の紹介からなっており、中国の歴史研究の内容的な案内は第Ⅰ部「研究と史資料」で行われている。分量的にも第Ⅰ部は全体の半分以上を占めており、本書の中心的部分を構成している。

第Ⅰ部は、第12章の「世界のなかでの中国史」を除いて、第1章の「先秦」から第11章の「現代」まで時代別の構成になっている。『中国史研究入門』と『アジア歴史研究入門』（第1・2巻）も時代別の構成になっていたのであるが、その構成の仕方は類似していた。表記上の目につく違いは、最後の章を前者は「現代」とし、後者は「中華人民共和国」としているといった程度のことである。この両書と本書を比較してみると、時代別の編成方針に違いがあることがわかる。それは大きく分けて2つあるが、第1点として、本書では「三国五胡」や「西夏」が章の見出しのなかに取り入れられていることである。両書は1919年の五四運動で近代をⅠとⅡに区分し、中華人民共和国成立以後を現代と位置づけていたが、第2点として、本書は革命史や民族運動史に基づく時代区分を採用していないことが指摘できる。「中国近現代史研究」という用語がしばしば使用されているように、近代と現代の区別にあま

りこだわりは見られないが、「史資料の解説」内容によれば、19世紀半ば以降の清末を「近代」で、中華民国成立以降を「現代」で扱うという役割分担になっているようである。「近代」あるいは「現代」という語感と内容が必ずしも合致してはいないが、中華民国史という観点からの区分であり、王朝史(国家史)という視点で全体が一貫することになる。

『アジア歴史研究入門』の場合は各章で分量にかなりのばらつきがあり、「近代」と「中華人民共和国」の部分がかかなり長かった。これに対して本書の第11章までの各章は、若干の例外はあるが、ほぼ25頁前後で整えられている。第5章、第6章、第7章の例外的な増減は「史資料の解説」分によるところが大きいため、研究の内容紹介という面では各時代の均等的な扱いが徹底しているといえよう。これは単純な執筆上の分量的制限の結果とも考えられるが、また各時代を分け隔てのない意義を有するものとして歴史研究の対象に扱おうとする編集の姿勢とも理解できる。

各章の内容は、大部分が「研究の視点」、「研究の展開」、「史資料の解説」という順で組み立てられている。ただ第1章と第7章が例外で、「研究の視点」と「研究の展開と史資料の解説」という2節立てになっている。おそらく研究の展開の叙述上の便宜が解説すべき史資料の分量の関係で、このような扱いがなされたのであろうが、本書のような性格の書物の場合は読み手の利用方法を第一に考えるべきであろう。本書を利用するにあたって、中国史の研究を志す人であっても冒頭から最後までを読んで入門を試みるわけではなく、ある程度の予備知識をもって興味のある章＝時代を開いて読むという行為を断続的に行うであろう。したがって入門書は事典的な意味を兼ね備えているのであり、形式的ではあっても構成は共通にしておいたほうが便利である。

入門書という観点で読んだときの構成上の問題点は、各章の「研究の展開」にもある。「研究の展開」の叙述上の構成は統一されておらず、時代別、王朝別、同一王朝の時期別、あるいは「政治」等の歴史の分野別と多様である。扱う時代によって研究の関心や成果の蓄積のされ方が異なるし、分野別といっても明確に区分できるわけではないが、入門書であろうとするためには一定の指針が求められよう。多くの章は分野別の叙述形式をとっているが、この場合、話題を承知で注文をつけるとすれば、この入門書に導かれて中国の歴史研究を志そうとした人は、隋唐期の自然環境のその後に興味を抱くかもしれな

いし、「社会」、「社会・文化」、「社会経済史」、「社会史・経済史」、「社会・経済」の「社会」の共通した意味づけを求めるかもしれない。

四半世紀を経た中国史研究

『中国史研究入門』と『アジア歴史研究入門』の出版から四半世紀ばかりの年を経て、中国史研究はいかなる新たな視点を獲得し、どのような内容上の発展を達成することができたのか、このことを検証しこれからの学徒に示すことが本書の重要な使命であろう。先に「三国五胡」や「西夏」が見出しのなかに取り入れられた点を、本書の構成上の特色として指摘したが、そこには中国を「ユーラシア史の文脈」でとらえなおそうとする考えがあるようである。このような問題関心を共有し、中国史研究の現状に厳しい批判を展開するとともに、新たな指針を提示しているのが第12章である。第1に、日本の研究者にとって中国史は外国史であり、そうであるが故に可能な世界史のなかに位置づけた研究の必要性が提起されている。これは新たな指針というよりは、当然のことの再認識といったほうがよいかもしれないが、細かな叙述上の問題から研究の視角にいたるまで、現実にはなかなか自覚的にされない問題である。第2は、先のユーラシア世界史およびそれからのグローバル世界史への転換という研究の枠組みである。第3に、西洋史や日本史の研究者に振り向いてもらえるような「良質のアジア史と中国史」という注文にも、真摯に耳を傾ける必要があろう。私も常々感じていることであるが、東洋史あるいは中国史の研究はあまりに内向きで、他者との対話の契機が乏しい。

第12章で示された、このような中国史研究のための新しい指針は、本書全体にどのようにいかされているのであろうか。近代以前の章において、中国という国の枠にとらわれることなく、「東アジア地域の歴史」、「ユーラシア史」、「東アジア史」、「東アジア王朝」といった言葉に象徴される、より広域の地域史的研究の提唱が見られる一方で、むしろ書名に即して禁欲的な章もある。また新しい指針が共有されているわけではないが、当該の時代に関する研究の歴史が手際よく整理され、読者にとって極めて親切な章もある。入門書というものに対する執筆者の理解の違いも影響しているのかもしれないが、第12章で提起されたような指針が、時代ごとの執筆全体に浸透しているわけではない。

まさにグローバル世界史の時代に入った近代や現代の中国史研究を扱っているのが第10章と第11章

であるが、社会・経済の面に関する歴史研究の進展に比較して、政治・外交・思想面の研究の相対的な停滞といった印象を受ける。とくに第10章の「政治・外交」については、該当する研究者の一人として忸怩たるものがある。なおこのような項目立てでしか整理できないとすれば、それはまさに研究の停滞であろう。ここで必要なのは清専制王朝の崩壊と中華民国の形成に関わる事項であり、第9章「研究の展開」の「国制史・政治史」および財政史のその後の展開が、より世界史的視野のうちに検討されるべきであろう。

本書の「はじめに」によれば、①中国史の研究に携わる学生・専門家のみならず、②日本史・西洋史・世界史など隣接する歴史の研究者、さらには③「中国とその歴史に関心をもたれるより広汎なかたがた」が読者として期待されているが、欲張りすぎであろう。①の読者のための条件を備えていれば、必然的に②③の読者の期待にこたえられるわけではない。本書のように細分化した時代（王朝）ごとの解説は、むしろ問題の核心をつかむのに苦勞させることもある。「史資料の解説」を簡潔にし、「研究の展開」をより充実させる必要も生じるが、小見出しのつけ方、すなわち研究の整理と批判の枠組みへの工夫が重要になってこよう。

（名古屋大学出版会，2006年1月，v+467頁，3,990円）